

学生の学会活用法

様々な研究会やシンポジウムが全国各地で行われています。これらの研究発表の場には企業の研究者や公的機関の研究者、また大学の教官や学生など様々な方々が参加されています。発表者にとっては研究成果を発表する大事な場であり、聴講者にとっては各分野における最新の情報を手に入れる場であると言えます。また、多くの研究者が一堂に集まることを考えれば、研究者同士の親睦を深めるということも、それ自体で大きな目的と言えるのでしょうか。しかし、この「親睦を深める」というのが、学生にとっては実は大変難しいものなのです。

先日、私はあるシンポジウムに参加しました。このシンポジウムは3泊4日の日程で、同じホテルに全員が宿泊して行う合宿形式のものであり、学生も数多く参加することがわかっていましたので、これを機会に他大学の学生とも交流を持てることを楽しみにしていました。ところがいざ会場に行ってみると、案の定ほとんどの参加者がスーツ姿で、学生なのかどうか区別が付きませんでした。名札はあったのですが、大学というだけでは教官かもしれないということもあり、話しかける勇気をなくしてしまいました。

長年この分野で活躍されている方々は、顔見知りも多いことと思いますが、我々学生にとってはほとんどが顔を知らない方々です。まれに見覚えのある人がいても相手は有名な教授であったり、こちらが一方向的に知っているだけということがほとんどです。

結局当初の計画は実らず、話相手のいない肩身の狭い思いをすることになったわけですが、3日目にシンポジウムの実行委員長をやっておられる先生にお願いして、学生は夜にホテルのロビーに集まってもらうように、アナウンスして頂きました。今から考えればずいぶん図々しいお願いでしたが、効果は絶大で、その夜はロビーに学生がぞくぞくと集まってきました。

昼間はスーツ姿だった学生も、さすがに夜はラフな格好になってすっかり親しくなり、主に研究の裏話で盛り上がりました。我々は他大学の研究室をほとんど見たことがなかったのですが、いろいろ話を聞いて、自分が井の中の蛙であったことを思い知らされました。また、話をしてみても、相手も同じ学生だという安心感もできましたが、その反面、相手が立派に見える時もあり、かなり刺激を受けてしまいました。

一部の学生とは、メイリングリストをつくり、現在も交流をつづけています。まだ、互いの顔を忘れない様にと顔画像を送ったりしている程度ですが、将来は論文を発表する時にメンバーにそれを知らせるといったふう利用していくことになっています。メンバー全員が同じ研究分野であるので、互いに刺激になるのは確実で、いい影響を与えることができればと思っています。

われわれ学生は、同じ大学には友人が大勢いても、同じ研究分野での友人となると、極端に少なくなるのが実情ではないでしょうか。まだまだ研究を始めてから間もないわけですから仕方ないのかも知れませんが、同じ研究分野の知り合いができるということは、とても意義のあることだと思います。学生同士だからこそいい意味でのライバル心が生まれ、それを大いに利用して互いに研究を深めていくことができれば最高です。

せっかくの同じ研究をしている人間の集まりの学会も、単なる研究発表の場としてしか利用しないのはもったいないと思いませんか？ 学生の皆さん、学会をもっと有効に活用していきましょう。そしてどんどん仲間を増やしていきましょう。